多彩な協働や工夫で地域活動の負担を軽減！

府内において、見守り活動やサロン活動、子ども食堂といった取り組みが広がっています。その一方で、担い手不足、特定の活動者への負担増、といった課題が多くあります。これらを解消するためには、地域の団体との連携（民間企業などを含む）や役割分担、取り組みの工夫が一層重要となります。

そこで、「民間企業との連携・地域性」、「きめ細やかな会議体制」、「見守り活動における工夫」をキーワードに府内3市町村の取り組みを紹介します。

民間企業との連携・地域性を活かした取り組み

◆千早赤阪村

千早赤阪村社協は㈱ヤクルトと契約し、登録している65歳以上のひとり暮らし高齢者宅にヤクルトを週3日無料配布する「ひとり暮らし愛の訪問事業」を行っています。配達員が訪問時に声かけと安否確認をし、気になる方がある場合には村社協へすぐに連絡が入ります。

見守り対象者からは、「ヤクルト訪問をきっかけにコミュニケーションが生まれ、不安感が和らいだ」といった声があがっています。村社協では、これからも民間企業と一層連携し、多職種協働によるより細やかな見守り支援の体制づくりをめざしています。

立派な木箱を作りました！

風通しの良い会議体制

◆豊能町

豊能町では、社協、民生委員児童委員協議会、行政の三者で「三者連絡会」を開催しています。当連絡会は避難行動要支援者名簿の管理方法の共有や事業の提案など、町全体の意思疎通の場となっています。連絡会で話し合われた内容は社協から地区福祉委員会へと報告され、見守り活動にも生かされています。

吉川・ときわ台地区福祉委員会では、「丁目会議」や「定例会議」を月に1度開催しています。丁目会議は、同じ丁目の個別支援の担当者が集まり、気になる見守り家庭等について情報交換を行います。定例会議では地区内の福祉委員と社協事務局が参加し、活動や事業などについて話し合います。

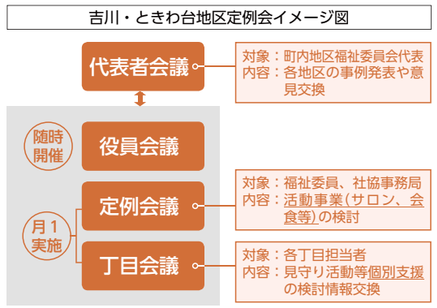
役員会議でテーマ（課題）を調整し、定例会議の話し合いがスムーズに進むよう工夫しています。

他にも町社協主催で2カ月に1回開催される「代表者会議」では町内各地区の代表者が集まり、事例発表や意見交換を行うなど、風通しの良い仕組みづくりが定期的に行われています。

また、世代間交流による多世代のつながりの場づくりを積極的に行っており、小吹台（こぶきだい）地区福祉委員会では、年に1回小学生を対象に木工作教室を開催。福祉委員の中には元木工職人がおり、村の木材を作品用のパーツに切り分けたり、子どもたちでも簡単に作れるような説明書を手作りしています。

この教室は、ノコギリなどを使ったことのない小学生に使い方を伝授するなど、夏の楽しい体験教室になっています。

吉川・ときわ台地区定例会イメージ図



見守り活動における工夫

◆四條畷市

田原台・さつきヶ丘地区は、山間部に位置し、近隣のスーパーの閉店もあり、車がないと生活に不便を感じる地域です。

見守り活動を行う際には、訪問を拒否されたり、そもそも安否確認だけのためにチャイムを押すことにためらいを感じるなどの課題がありました。

そこで、当該地域の有志の民生委員が時間をかけて地域のまち歩きをし、移動販売や朝市などの社会資源を載せた「田原便利マップ」を今年2月に作成。マップには、地区の見どころや見やすいマークをつけるなどの工夫が凝らされ、見守り訪問時の話題づくりとなり、会話が広がっています。

さらに、マップに続いて地域のニーズに応えた高齢者の生活に役立つ最新情報などを掲載した「お元気ですか」を毎月作成し、訪問時に配っています。安否確認にとどまらず、自然とコミュニケーションが生まれ、豊かな会話の中から信頼感も生まれています。

「お元気ですか」と「田原便利マップ」

調査研究事業

社会的に孤立している人々への支援にむけて

府民児協連　主任児童委員連絡会

個別支援事例検討の実施

府民児協連は、9月20日に平成29年度第1回主任児童委員連絡会を開催し、参加者45人で8グループに分かれて個別支援事例の検討を行いました。

事前に主任児童委員から収集した事例の中から、不登校2事例、児童虐待2事例を取りあげました。

事例検討の協議項目

①事例から見る主任児童委員の役割について
②児童委員との協働について
③他機関との連携について
④社会的に孤立している親子へのアプローチについて

各グループから出た意見

●主任児童委員はつなぎ役、発見役、整理役である。
●日頃から地域担当の民生委員・児童委員と情報交換、情報収集し連携をしていくことが大切。一方、プライバシーに入り込むケースでは、共有が難しい場合もあり、専門機関との連携が有効。
●親のがんばりを認めること。
●子どもだけでなく親へのアプローチも重要。まず顔見知りになること。

アドバイザーから

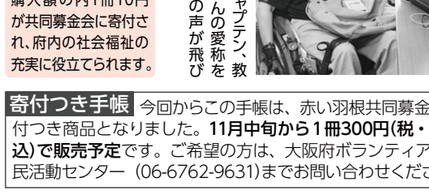
大阪府子ども室家庭支援課の成光賢一（なりみつ）課長補佐（写真・円内）から、事例検討後に次のように講評をいただきました。

児童相談所は介入的に関わる役割があり、一方、主任児童委員は子どもやその家族に長い期間関わる視点をもって支援する存在です。『子ども、家族のことを気にかけているよ（寄り添っているよ）』というメッセージを発信できる方が地域におられることは心強いと感じています。

また、社会的に孤立している方々への支援では、支援を拒否されることもあり、時間をかけて寄り添っていく視点が大切です。そのために他機関と連携し、主任児童委員ひとりで抱え込まないようにする必要があります。

関係機関と協働を進めるうえで、日頃から顔の見える関係をつくり、それぞれの機関の役割や強みを知ることが大切です。

府民児協連では、平成30年度の大阪府民生委員（方面委員）制度創設100周年記念事業の一環としてこの調査研究事業に取り組んでおり、これからも社会的に孤立している人々への支援を進めていきます。


事例提供者から事例概要の説明を受け検討しました。

アドバイザー
成光氏

寄付つき

2018年〜2019年

OSAKAボランティア手帳 デザイン決定！

作品テーマは“ぐるぐるパワー”

府社協では、2年間使用できるボランティア手帳を発行しています。表紙デザインの募集は今回で2回目。前回に続き、市町村社協を通じて当事者（障がい者・認知症・ひきこもり、など）からデザインを募集し、7作品の中から藤井寺市の貝本充広（かいもとみつひろ）さんの作品が選ばれました。

デザインに込めた思い

貝本さんは、在宅でイラストレーターをしています。明るく楽しい作風のように、相手を元気にすることが大好き。「ぐるぐるは元気がほとばしるマーク」との思いが、デザインを選ぶボランティアのみなさんの共感を得ました。

「色とりどりのうずまきが所々で手を取るように向かい合っています」皆さんが喜んで使っていただけるような手帳をイメージした作品です。

貝本充広さんHPはコチラ
http://www.kaimoto.net/

大学3年生の時、事故で車イスの生活になり、それからボランティアとして20年以上、母校である小学校のパソコンクラブ講師を続けています。

クラブ発表会にむけて、子どもたちのやりたいことや発想を引き出しつつ、「毎回同じことはしない」との信念で、その準備に知恵と工夫を惜しみません。常に笑いを忘れない貝本さんの取り組みに、子どもたちや先生方からも「おもしろい」と好評です。

しかし、プロとして活躍し始めても「社会の中で自分は何か役に立っているのかな」と自問自答することがあるとのこと。「社会の役に立ちたい」と同じ思いを持つ仲間とのチャリティー活動でのつながりや、ボランティアを通した子どもたち、地域とのつながりが、貝本さんのパワーや発想の源となっています。

クラブ活動中「キャプテン、教えて！」と貝本さんの愛称を呼ぶ子どもたちの声が飛び交います。

We support

購入額の内1冊10円が共同募金会に寄付され、府内の社会福祉の充実に役立てられます。

寄付つき手帳 今回からこの手帳は、赤い羽根共同募金の寄付つき商品となりました。**11月中旬から1冊300円（税・寄付込）で販売予定**です。ご希望の方は、大阪府ボランティア・市民活動センター（06-6762-9631）までお問い合わせください。